

解答

一

問一

石を彫ると得体の知れない何かにのみこまれ、自分を失ってしまうと思ったから。

問二

寛次郎と勝負をしたくないと思っていたが、寛次郎のちょう発を受けて、おそろしく思っていた一線を越えて勝負をしようと思うようになった。

問三

申吉のノミの音の迷いのなさに動ようしたため、鼻唄をうたうことで、申吉のことを考えないようにしようという気持ち。

問四

自分の作品の出来に満足していたが、申吉の作品の方が圧倒的に上だと思い、思い上がっていた自分をはずかしく思う気持ち。

問五

申吉の地蔵は、気迫や勢いがあるが地蔵と呼べるものではなかった。一方で、寛次郎は平凡だが地蔵らしい地蔵を彫っていたことから、寛次郎は、二人の勝負を引き分けとした親方の判定に納得することができた、ということ。

二

問一

二十代半ばまでにできるだけ多くのことを、知識ではなく感覚として身につけること。

問二

事前に勉強して身に付けていた子供兵の知識とは異なった事態に出くわすことがあるように、現実はその時の状況によって姿を変える多面的なものであることを受け入れ、新たな視点を持つということ。

三

(1) 英気

(2) 招待

(3) 画策

(4) 単刀

(5) 付和